

気仙沼内湾地区の「まち」と「海」の復興コミュニティ拠点

Community Spaces for Post-disaster Recovery, Connecting the Sea and the Central Area of Kesennuma

阿部俊彦 Toshihiko Abe

東日本大震災の津波被災地の復興では、インフラの復旧や住宅再建が優先される一方で、住まいの移転や土地区画整理による土地の交換によってバラバラになってしまった地域コミュニティの継承が課題であった。また、ボランティア等の支援者と地域住民の交流による新しいコミュニティが地域復興の力になっていることも忘れてはならない。近年の大震災の復興プロセスでは、「発災後の避難所」「復興途中の仮設の生活」「復興後の本設の生活」というように、段階ごとに生活の場が変わっていくことが想定されるため、それぞれの段階や地域性に対応したコミュニティ拠点のデザインの工夫が求められている。

筆者は、震災後から気仙沼市内湾地区復興まちづくり協議会(以下、協議会)のコーディネーターとして行政と市民による地域協働の復興まちづくりのランドデザイン、復興住宅、ウォーターフロントエリアの計画づくりに携わってきた。そのなかで、コミュニティスペースを擁した商店街の共同店舗やウォーターフロントの公共施設等、幾つかの復興事業は具体的な計画検討を終えて、設計段階に向かおうとしているところである。しかし、防潮堤の建設や土地区画整理事業によるかさ上げ造成工事が終わるまでは、建物工事には着手することができない。

震災から3年半が経ったが、地域の人が集まる復興コミュニティ拠点は内湾にはなかったのか。実は、内湾地区は、周辺の被災した地区と比べて被害が少なかったため、一部の建物が流失せずに残っ

た。震災の年に、いち早く建物の1階の空き店舗を改修した「まち」の復興コミュニティ拠点がある。また、震災後2年半を経て、港のすぐ目の前に仮設ではなく本設の「海」の復興コミュニティ拠点が完成している。本稿では、気仙沼の顔である内湾地区に生まれた二つの復興コミュニティ拠点を紹介し、それらが内湾地区の復興デザインに与えている影響について述べることにする。

子どもたちのための「まち」の遊び場：みなみまちcadocco

震災後、しばらくの間は、高台にある学校の校庭や体育館は避難所として使われていたため、子どもたちが遊べる場所がなかった。気仙沼の演劇塾「うを座」も練習場所を探していた。そこで、仮設商店街「南町紫市場」の坂本正人さんが中心になって、なんとかして場所を確保しようと、被災した薬局をお願いして空き店舗を借り、改修に必要な資金を調達するためにセーブザチルドレン等の協力を得た。イラストレーターの奥原しんこさんの企画と、服部滋樹さん(graf)の設計



図1 フラダンスのイベント会場に利用されるcadocco [撮影:みなみまちcadocco]

早稲田大学都市・地域研究所客員主任研究員、LLC 住まい・まちづくりデザインワークス代表/1977年生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院修了。都市デザイン、まちづくり、建築設計。早稲田大学、工学院大学非常勤講師。気仙沼内湾まちづくりコンペ優秀賞受賞。共著に『まちづくり市民事業』

で、震災の年の2011年12月18日にみなみまちcadoccoはオープンした。

ここでは、子どもたちが安心して自由に遊ぶことができる。日々、部活や「うを座」による演劇、コーラス、フラダンス、ヒップホップ、伝統芸能(太鼓)、バンドなどの練習が行われている。多くの練習場が被災したなかで、「あまり大きくないけど練習するにはちょうどいい大きさ」「道路に面してガラス張りオープンな雰囲気街の舞台のような形がよい」「鏡や黒板などがあるので使い勝手もよい」「気仙沼のにぎわい文化の発祥の地である南町に集まれるのがよい」など、利用者にはとても好評である。また、全国の支援団体によるワークショップ・お芝居・コンサートのほか、隣接する仮設商店街と連動し、商店街のイベントや組合の会合などに活用され、まちの人々の憩いの場となっている。

現在も復興過程における仮設の施設として、利用料金は市内団体150円/時間(市外団体は200円/時間)で、掃除は週に1回ボランティアをお願いしている状況である。しかし、いつまでも空き店舗を借り続けることはできない。仮設商店



図2 cadoccoでの親子参加の生け花講習会の様子 [撮影:みなみまちcadocco]



図3 目の前に内湾の港の景観が広がるK-port [筆者撮影]

街では、共同店舗に災害公営住宅(完成した住戸を市が買い取る方式)を併設した共同ビルを計画し、その一角にcadoccoと同じ機能を備えたコミュニティ拠点を検討しているところである。空き店舗を活用したコミュニティ拠点の自由でオープンなデザインを継承し、2年後には引き続き地域に愛される本設の「まち」のコミュニティ拠点に生まれ変わることを期待したい。

「海」で生きていく人たちをつなぐカフェ: K-port

内湾地区の復興まちづくりの過程において、宮城県による津波防護のための防潮堤の計画は、復興を遅らせる要因のひとつになった。「防潮堤によって海とまちが断絶されては、景観や水辺での営みが成り立たない」という理由から、多くの地域住民は4~5mの防潮堤が岸壁に建設されることに対して反対してきた。そのような状況下で、K-portは、防潮堤をこの建物よりも前につくらせないと言わんばかりに、目の前に海が広がる敷地に計画された。この建物は、俳優の渡辺謙さんが気仙沼で活躍する産業人の方々と一緒に企画したもので、伊東豊雄さんの設計で2013年10月に完成した。

普段は、地元食材を活かした軽食や飲み物を提供するカフェとして運営されているが、人々を結ぶコミュニケーションの場として、ワークショップの開催やエ

ンターテイメントのイベントにも利用されることもある。また、カフェの隣には、企画にかかわった磯屋水産の安藤竜司さんの店舗があり、多くの来訪者がカフェで休憩した後に、そこで魚のお土産を購入されている様子が見える。ちなみに、これらの建物が完成した後に、防潮堤の計画位置は変更され、建物の背面に建設されることになったため、建物から海への眺望は守られることになった。まさにK-portは、海と生きるまちの復興のシンボルと言える。

「まち」と「海」の復興コミュニティ拠点をつなぐ復興デザイン

震災前から衰退傾向にあった中心街が、震災によって立ち上がることができないところまで経済的なダメージを受け、多くの商業者が新市街地に移っていった。それでもなお、気仙沼のみならず町文化の発祥の地である内湾で生き続けたい。二つの復興コミュニティ拠点の立ち上げの経緯からは、そんな内湾地区の復興まちづくりのリーダーたちの覚悟がうかがえる。

明治期の埋め立てから昭和中期までは、気仙沼湾の埋め立てが行われ、海との関係の強化が内湾地区の都市の発展の推進力と



図4 K-portで模型を使った復興まちづくりワークショップを開催 [筆者撮影]

なっていた。しかし、その後、今回の震災に至るまで、にぎわいと暮らしの中心は内陸のバイパス沿いの新市街地に移りつつあり、市民は海から離れつつあった。しかし、協議会で取りまとめた今回の復興まちづくりの計画では、再び海との関係の強化を図るための都市デザインの戦略を中心に据えることになった。それを具現化するためのプロジェクトが、震災前にはなかった「まち」と「海」をつなぐ「海の見えるストリートとウォーターフロント」を新たに整備しようという計画である。

二つの復興コミュニティ拠点をつなぐ道が復興まちづくりの中心軸となり、その沿道に観光商業機能が集積し、観光客と地域住民の交流の場が生まれることになるだろう。



図5 まちと海をつなぐウォーターフロントのイメージ模型 [筆者撮影]